俺の街のデパートで

とっくり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の街のデパートで

【Ｎコード】
Ｎ７６０４Ｙ

【作者名】
とっくり

【あらすじ】
いつもどうりの『日常』が続くと思っていたそんな矢先。新装オープンのデパートで子どもから老人まで中にいた人たち全員閉じ込められた！？
生き残れるのは七人まで！？そして最悪のゲームが始まる。黒幕は？目的は？主人公たちは、生き残ることができるのか……

プロローグ　「新装オープン」

春が来たと思うほど、最近は、暖かくなってきており、街の様子も変わってきた。
入学シーズン到来、といったようで家族ぐるみで休日に買い物をする人が増えている。

三月二十六日　土曜日　街の中心的デパートの新装オープンの日。

今日もいつものように、荷物を持たされる父親や駄々をこねる子ども、それでも楽しそうに
会話をしながら買い物をする人。
新装と聞いて買い物に来る人。
いつもどうりの、人でごった返した息苦しい日が始まるはずだった。

高層ビルが立ち並ぶ街。そのビル群の中でひときわ高いビルの一室。きれいに整頓され、塵一つない部屋。パソコンをたちあげ、ひときわ大きいテレビの電源をつける男。
部屋を照らすテレビの画面には、朝の顔と言うべき大柄の男性アナウンサーがデパートの様子について
こと細かく丁寧に説明していた。その画面の後ろには、無数の報道陣の姿も見える。

『こちら本日新装オープンの王譲（おうじょう）グループのデパート前です』

『ごらんのように開店前から長蛇の列ができています。』

カメラの映像がデパート前の入り口を映した。走り回っている子どもから、高齢者の人まで
さまざまな年齢の人が並んでいる。

『さっそくインタビューしてみます。』

『今日は、何を楽しみに？』

『デパートの中にある、クラウン・クラウンっていうお店ですね。雑貨屋なんですけど、近くにお店がなくて……そしたらこのデパートの中にできるって聞いたので。』

笑顔で答える女性。

『そうですか、あとで私も行ってみようと思います。また、お伝えしたいと思います、それではいったんスタジオにお返しします。』

その様子を、見ていた男は、自分以外いないその部屋の中で独り言を零(こぼ)す。

「やっとここまで成長したな。」

（人を踏み台にしてきてようやくここまできた）

「とりあえず安心だ……」

この男もまた、いつもどうりの忙しい日が始まると思っていた。

プロローグ　「新装オープン」（後書き）

はじめまして、とっくりです。この作品を読んでくださった方々ありがとうございます。
初作品なので、たくさん矛盾があると思いますし、いつまで続くかわかりませんが
温かい目で読んで下さるとうれしいです。
次話は、できる限りはやく投稿しようと思います。

第一話　「さぁ、行こう」

同日。　王譲高校学生寮。

『……それではいったんスタジオにお返しします。』

「ねぇ、せっかくの休日だよ？」
広いとは、言えない二人用の部屋に声が残る。

「……」

「ねぇ、無視ですか？この二人部屋で無視ですか？」
あからさまに、文句を言う一人の少年。
声は、男子にしては、高く体も小柄。しかし筋肉は、細いながらにかたくしっかりしている。
顔は、童顔で背の低さも重なり中学生に間違えられることもあるらしい。
だがしかし、陸上部でそこそこ早い奴だ。……あんまり知らないが。
とりあえず青年でなく少年という扱いだ。

「……」

「――――……紅美ちゃん。」
少年の一言に過剰なほど反応し固まる俺。

……なぜ知っているんだ？
ま、まて落ち着け俺、如月紅美（きさらぎくみ）さんは、ただの友達じゃないか！！
たしかに、ちょっと細いし、雪のように白い肌もいい。それと対照的に黒くつやのある長い髪。さらに、目がぱっちりしてて背もちっ

ちゃい―　（俺に比べて）だが笑顔がお姫様のように可愛らしい……
ちょっとだけ、手に触れてみたいとか思うし、もし彼女だったらなぁとか……
しかし、そんなことは、万が一にもないぞ俺！動揺するな俺！
如月さんが彼女だったらかぁ……

「淳（りょう）くん……そういうことは、心にしまっておこうね？」

「悠（ゆう）……おまえエスパーだったのか！？」

悠と呼ばれた少年、もとい神埼悠（かんざきゆう）は、すらすらと先ほどの状況を簡潔に言ってくれた。

「いやいや、常識的にありえないからね？というか全部ぶつぶつ言ってたし、急に叫んだかと思ったら
遠い目しだすし……まさかとは、思ってたけどそんなに紅美ちゃんのこと好きなんだ？」

穴があったら入りたいとは、こういうことか……
こうなったら、認めるしかないな……

「あぁ、俺は、如月さんのことが好きだ！！」
言ってしまった。だがしかしこれで悠もわかってくれるだろう……

「ふぇ！？」

「え？まじで！そうだったんだぁ～」

不意に部屋の入り口から声がかかる。まさか！？

この可愛らしい声と女子にしては、乱暴な口調……
間違いない、この声は、如月さんだ。
だが、しかしなぜここに如月さんが？

「淳くん、また口に出てたよ？いくら紅美ちゃんが好きでも、紫苑ちゃんを乱暴扱いは、よくないと思うよ？……あながち間違ってないけど。」

「ヒドッ、私これでも一応か弱い女の子よ！？」
この乱暴なやつは、藤倉紫苑（ふじくらしおん）。女子の中では、割と背が高く、運動神経も良いほうで
悠と同じで陸上部に所属している。

「まぁ、それで？紅美のこと好きなんだ？」

「そう、それだ！なぜ、如月さんがここに居るんだ？」
素朴な疑問である。

「あっ、僕が呼んだ。」

「あっあの！！今日は、なんで私たちを？」

……顔が真っ赤になってる、可愛いなぁ
なんか、なでたくなってくる。

「淳、セクハラ～」
「淳くん、また口に出てるよ？」
もう、無視だこれは、無視するしかない！

「まぁ話を戻そうか、二人を呼んだのは、今日オープンする王譲デ

パートにみんなで遊びに行こうっていうことで集めたんだよ。」
それであんなに、話しかけてきたのか。
「いいじゃんそれ！行こうよみんなで！」
「紫苑ちゃんが行くなら、私もいきます！」
「じゃあ、決定ということで。」
「俺の意思はどこへ？」
「紅美ちゃんが一緒なのに？」
……そうか、そうだな！　俺のテンションは、限度というものを知らないらしい。
如月さんが来るなら、選択肢は、一つ！
「さあ、お前ら！今は八時だから、九時に出発だ！」

こうして、俺たちは、王譲デパートへ行くことになった。

ちなみに、如月さんが変な悲鳴を上げたのと
悠と紫苑が、ガッツポーズをしていたのは、秘密である。

第一話　「さぁ、行こう」（後書き）

紫苑　「なんか、私の説明雑じゃない？」

悠　「僕たちは、作者に逆らえませんから。」

とっくり　「雑で、すみません！！」

紫苑　「分かってくれてよかっよ！」

……というわけで、一話目です。次は、いつになるか分かりません。できる限りがんばります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7604y/

俺の街のデパートで

2011年11月23日21時00分発行